奈文研ニュース

No.30 Sep.2008

NABUNKEN NEWS

NARA CULTURAL PROPERTIES RESEARCH INSTITUTE

独立行政法人 国立文化財機構
奈良文化財研究所
〒630-8577奈良市二条町2丁目9-1
http://www.nabunken.jp/

古文書の調査

奈良の古寺社には、膨大な量の文化財が伝存しています。人間の手によって伝世されてきた文化財としては、質・量ともに世界的にも誇るべきものです。ですから、それら文化財の調査・研究は、当研究所発足以来の中心的なテーマの一つと位置づけられています。ただし、比較的地味な調査が多いので、注目される機会は少ないかもしれません。そこで今回は古寺社所蔵の古文書の調査についてご紹介します。

古文書でも、有名なものは管理も行き届き、内容もよく知られ、研究者が利用したり展覧会に出品されたりします。しかしそのような古文書は、全体の中のほんの一部にすぎません。古文書の大部分は、かつては寺社の中で使われていた書類が用済みになって箱詰めされ、蔵の奥にしまい込まれたものです。そして今もなお、しまい込まれたまま何が入っているかもよく分からない箱が、古寺社にはたくさん存在しています。当研究所の古文書調査は、そのような未整理の古文書を主な対象にしています。文化遺産部の歴史研究室では、それらを調査して目録を作成する、という最も基礎的な作業を長年実施してきました。当研究所の発足以来、半世紀以上継続していながら、まだまだ対象となる古文書が多くあるのですから、その膨大さが分かるでしょう。

調査は、単純といえば単純な作業です。箱のなかに入っている古文書を読んで内容を確認し、分類して番号を付けてラベルを貼り、調書を取り、写真撮影をしていくのです。もちろん、内容は千差万別・玉石混淆（ぎょくせきこんこう）で、虫に喰われたり埃にまみれたりしていることも多いのです。

しかし、まだ誰も触っていない箱を開けて、その中身を確認するその楽しさは、ちょっと体験した人でないと分からないかもしれません。このように、文化財を一点ずつ把握して初めて、それが歴史を語る史料になっていくのです。未知の史料と向き合い、その内容を理解すれば理解するだけ、歴史に対する理解が深まるのですから、調査にも力が入ります。

寺社の文化財は、先人たちが何百年もの間、大切に保管してきた結果、現在にまで残ったものです。それらの文化財は、寺社がはるか昔に創建されて以来、幾多の盛衰を経つつも、今日に至るまで途切れることなく存続してきた、その証しです。文化財調査の基本とは、まずは文化財をより良い形で後世に残すこと、そしてその上で、それらを歴史の史料として把握し、歴史を豊かにすることだと思って、日々、各寺社に出向いて調査に精を出しています。

（文化遺産部　吉川 聡）

古文書の調書とり（薬師寺にて）

未整理の古文書が詰まった箱（東大寺にて）

発掘調査の概要

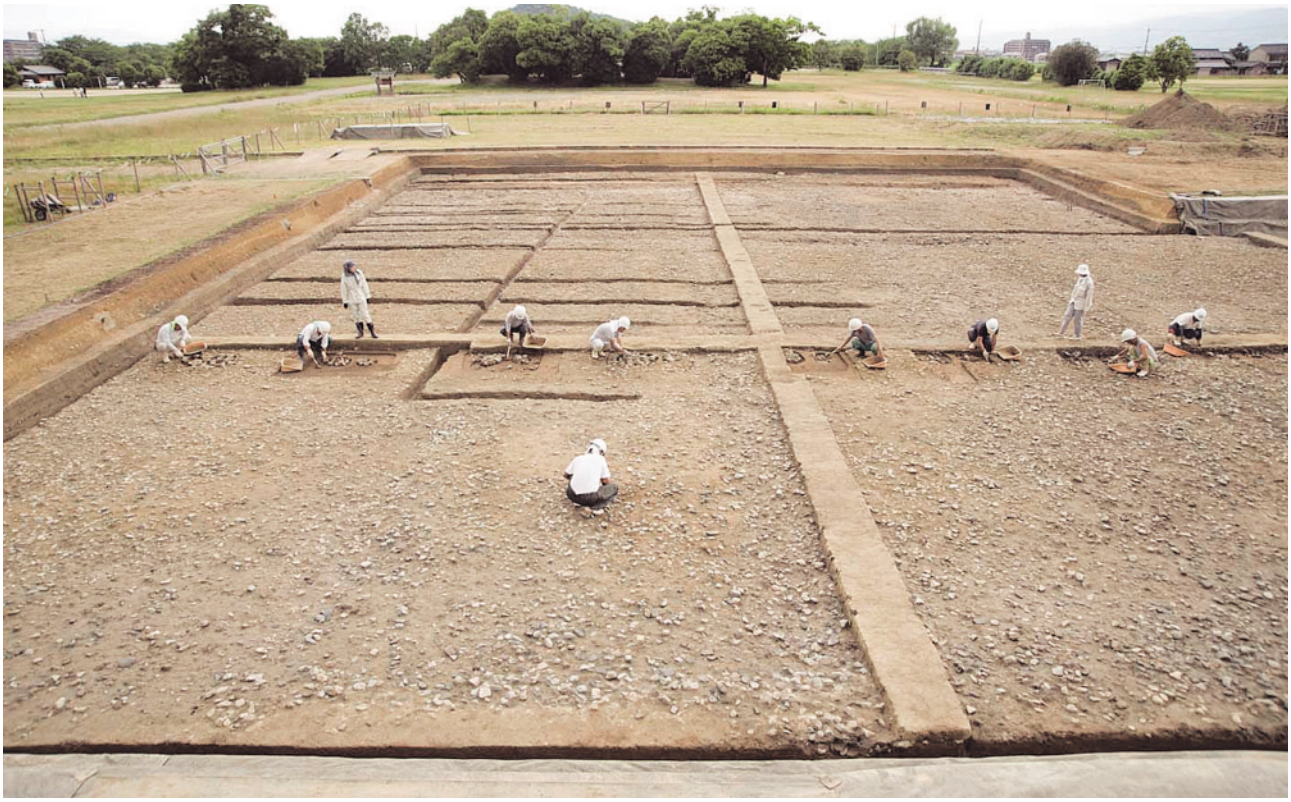
藤原宮朝堂院朝庭部の調査（飛鳥藤原第153次）

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、藤原宮朝堂院朝庭部の調査をおこなっています。朝庭とは朝堂院中央の広場で、儀式の際には役人がここに整列しました。これまでの調査で、朝庭部には礫（れき）を敷いて整地していることがわかっています。また、昨年の大極殿院南門の調査では礫敷の下に藤原宮造営時に資材を運んだ運河や建物の柱穴があることが判明し、それらの状況の解明も課題として残っていました。今後も朝庭部の調査を継続的におこなうこととなり、昨年の南門の調査区の南方に調査区を設定して、４月から９月までの予定で実施しています。藤原宮で朝庭部の本格的な発掘調査は今回が初めてです。

発掘調査の結果、礫敷の広場や柱穴列、溝、暗渠などが見つかりました。広場に敷いた礫は良く残っていて、1300年前の姿をそのまま示すものです。北側の大極殿院南門の近辺は一段高く造成しており、なだらかに上がっていきます。また、礫敷広場内には、暗渠を設けて排水の工夫をしています。

調査区中央部には、東西に３ｍ間隔で並ぶ柱穴列が８基見つかりましたが、中軸線で折り返すと、全部で13基あるものと推定できます。南門の南階段からは100尺（30ｍ）の位置にあり、東端の柱は南門基壇東端とほぼ一致します。横長の柱掘形に柱を２本東西に立て並べる構造で、柱を抜いた後に大ぶりの礫を埋め込んでいます。韓国では、統一新羅時代から石柱を２本並べて立てて、その間に幢竿を立てる幢竿支柱（どうかんしちゅう）があり、本例もそれと同じ性格のもので、儀式の際の旗竿をたてた柱穴と考えられます。幢竿支柱は平城宮、長岡宮でも見つかっていますが、位置は大極殿院南門の北で、数も藤原宮の13基に対し７基です。『続日本紀』大宝元年正月一日条には元日朝賀に７本の宝幢を立てたという記事がありますが、それは平城宮と同じく南門の北に立てていたのでしょう。今回発見した幢竿支柱は朝庭部では初の検出で、唯一の事例です。幡には四神等だけではなく、さまざまなものを立てたと考えられ、これまでの例とはまた異なった儀式の様子がうかがえます。

調査成果は新聞でも大きく取り上げられ、現場公開を３日間おこなったところ、約1000人の人が見学に訪れました。また、造営時の運河は礫敷の下で調査区内を南北に通っていることがわかりました。これについては現在も調査を進めており、その成果が期待されます。　（都城発掘調査部　玉田 芳英）



東西に並ぶ柱穴列（人がしゃがんで作業している場所）と大極殿（南から）

平城宮第一次大極殿院の調査（平城第431次）

平城第431次調査は、第一次大極殿院南面築地回廊の発掘調査です。南面築地回廊に関しては、第41次調査（1967年）を皮切りとして、これまでに数度にわたる調査をおこなってきました。その結果、南面築地回廊が創建以来、東楼・西楼の増築を経て、奈良時代半ばまで存続したことが判明しています。今回の発掘調査は、第41次調査区と第77次調査区との間に残った未発掘区を対象としたもので、南面築地回廊における最後の調査となりました。調査面積は約630㎡です。調査は2008年４月１日にはじまり、６月26日に終了しました。以下、第431次調査の成果を簡単にまとめてみましょう。

これまでの調査により、南面築地回廊の基壇は版築工法で築成されたことが知られています。また、その東半部では基礎となる地面を一度掘り下げ、その内部から版築層を積み上げた掘込地業も判明しています。今回の調査でも、基壇下に掘込地業を施していることと、基壇が版築によって築かれた様子を再確認しました。

さて、この築地回廊の基壇ですが、その南側が水田の造成で大きく削りとられていたため、礎石の痕跡が失われた部分もあります。しかし、築地塀北側の柱列には礎石の根石がよく残っており、築地回廊の柱間を推定することができます。すなわち、桁行は約4.6m（15.5尺）等間、梁行は約3.6m（12.0尺）と復元され、南面築地回廊におけるこれまでの調査成果と一致しています。しかしながら、基壇の上面が削り取られているため、築地塀の痕跡は完全に失われていました。

築地回廊にともなう遺構としては、雨落溝および石を詰めた溝を検出しました。回廊北縁の雨落溝は、礫混じり層の上面で回廊創建時のものを、灰色の砂利層の上面で回廊解体直前のものを見つけました。なお、創建時の雨落溝にほぼ接して石を詰めた溝があり、回廊付近の排水にかかわる暗渠の可能性があります。また、築地回廊の解体にかかわる遺構として、基壇外装の抜取溝も検出しました。

このほか、築地回廊の北側で大極殿院の広場の礫敷を検出しています。この礫は二度敷き直されたことが知られており、今回も下位から褐色の礫混じり層、黄褐色の砂利層、灰色の砂利層を確認しました。それぞれ下位から順に回廊の創建時、東楼増築時、還都後の礫敷に対応するでしょう。

以上、今回の調査成果は、次の通りです。

①第一次大極殿院南面築地回廊の基壇は、掘込地業を施したのち版築工法で築いていることを再確認しました。

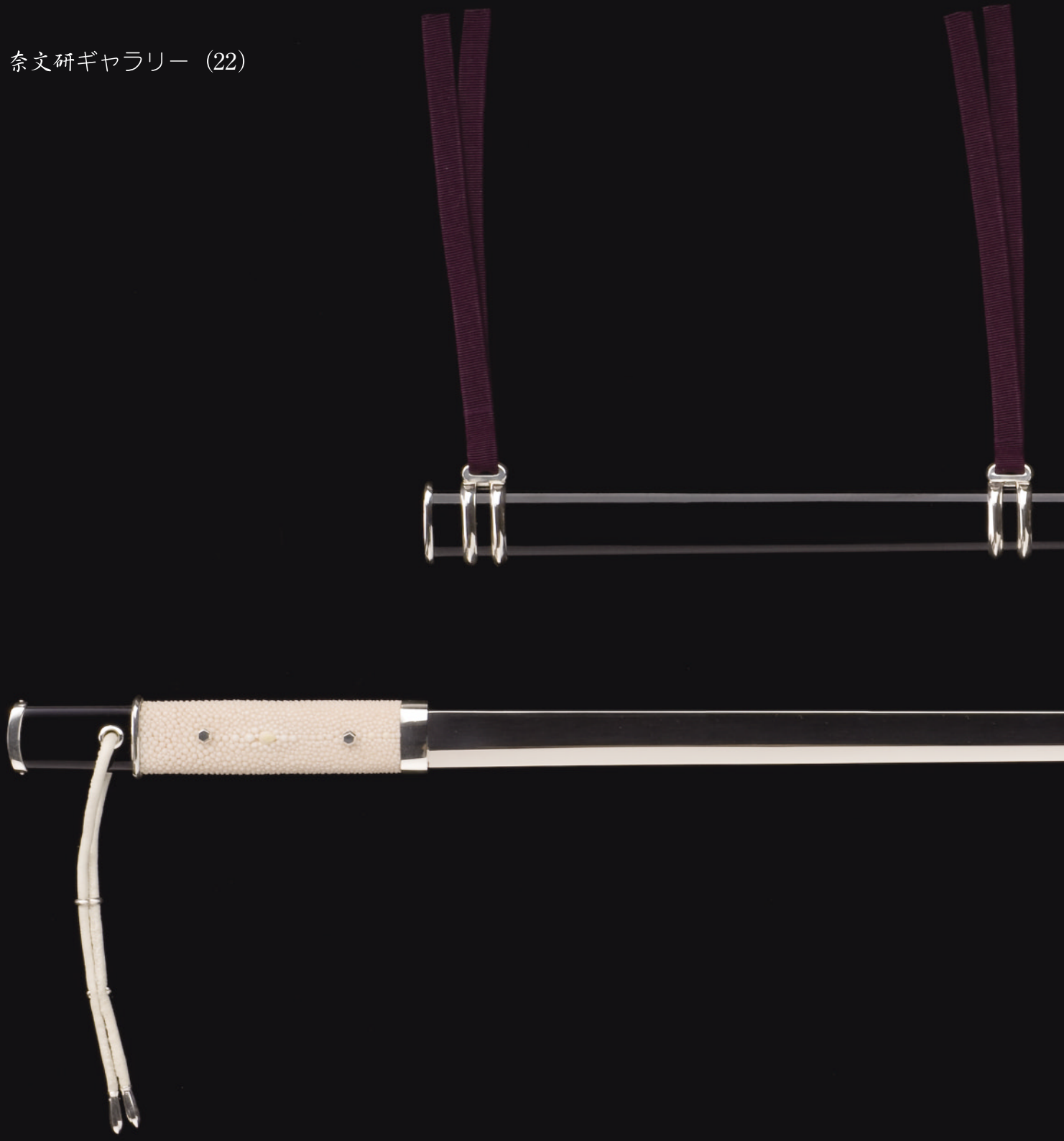
②礎石の痕跡は、推定どおりの位置で見つかりました。また、基壇の南北縁では雨落溝などを検出しました。

③大極殿院内庭部では、創建以来、礫を二度敷き直していることを再確認しました。

（都城発掘調査部　森川 実）

第431次調査区全景（西から）

築地回廊の礎石痕跡（東から）



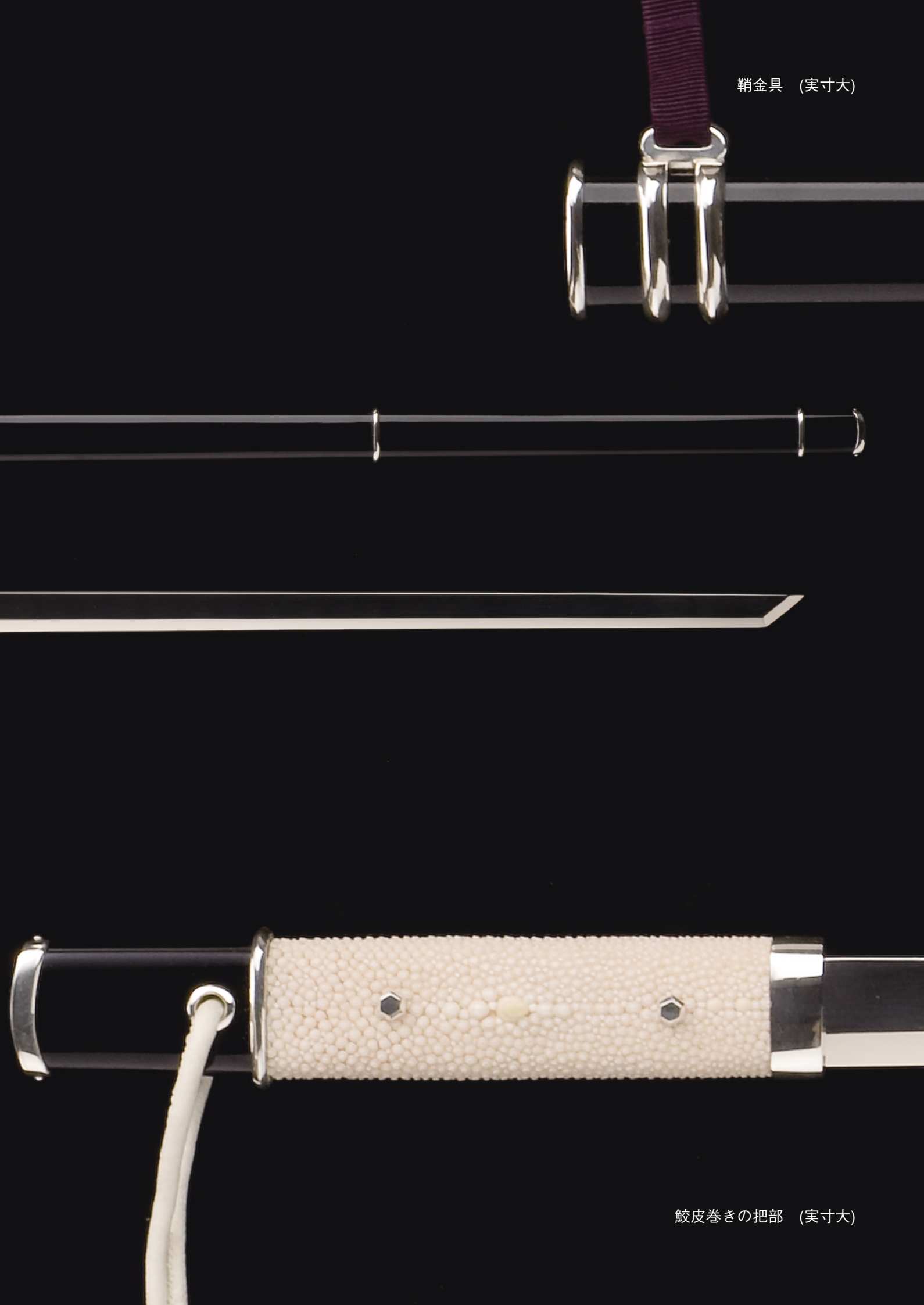
キトラ古墳出土銀装大刀の復元品

これは、奈良県明日香村キトラ古墳から出土した大刀の復元品です。キトラ古墳といえば四神や天文図、十二支像など石室に描かれた壁画が思い浮かびますが、石室からは大刀の破片や飾り金具など、豊富な副葬品も出土しました。

大刀は盗掘の際に壊され、小さな破片となっています。錆（さび）落としを進めるうちに、鞘に黒漆を塗り、銀の金具で飾っていることがわかりました。そこで、高松塚古墳や石のカラト古墳などの出土例を参考に全体像を推定し、約５ヶ月間かけて復元品を作りました。

完成した銀装大刀は長さ90.3㎝、重さ672ｇ。刀身の材質は真鍮製、金具は銀製です。表面に黒漆を塗り、把には鮫皮を巻いています。全体に派手さはないものの、洗練された美しさをもち、被葬者の身分の高さを感じさせます。これまで壁画が注目を集めてきたキトラ古墳ですが、副葬品もまさに一級品です。今後の展示等に活用したいと思います。

（都城発掘調査部　豊島 直博）



鞘金具　(実寸大)

鮫皮巻きの把部　(実寸大)

木簡字典

文字は、時代や地域によっても様々な書かれ方をします。そこで、古文書や木簡を読むときには様々な形の文字を集めた「字書」が必携です。日本古代木簡から字書をつくることは、私たちの「宿願」でした。こうした課題に、答えようとした最初の試みが「木簡画像データベース・木簡字典」です。優れたデータベースとして大変好評ですが、インターネットに接続しないと利用できない、という問題があります。やはり、ハンディな冊子体の字書も必要だ、ということで『日本古代木簡字典』を編集することになりました。

木簡から字書を編集する際には、大きな障害があります。木簡の文字は、紙に書かれた文字に比べて不鮮明なので、鮮明に印刷することが困難です。文字の不鮮明な字書では、役に立ちません。そこで今回は、まず木簡の写真原版を高精度でデジタルデータ化しました。次に、コンピュータで、これらの写真データから一文字ずつの画像データを作成し、さらに徹底的に鮮明化処理をおこないました。一文字ずつ、木簡の文字の持つ雰囲気もなくさないよう、丁寧に作業を進めます。墨を追加するようなことはおこなっていません。こうした作業によって、生の木簡の文字をそのまま鮮明にして、利用者に提供することができました。

文字の選択は日頃から木簡釈読に従事するスタッフがおこない、できるだけ多様な字形を集めました。約1000字種・5000文字を収録しており、日本古代木簡の文字のほとんどの部分をカバーすることができたと自負しています。また、八木書店から市販もされ、売れ行きも好調な様子です（2,310円 税込）。

ぜひとも多くの方にご利用いただき、かつご意見を頂戴してよりよい字書へと進化させていきたいと考えています。　　（都城発掘調査部　馬場 基）

完成した『日本古代木簡字典』

隋唐墓出土副葬品の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究では、2006年度から遼寧省の隋唐墓出土副葬品の調査・整理・研究をおこなっていますが、本年度も10月ならびに来年３月に遼寧省瀋陽市での調査を予定しています。それに先立ち、遼寧省文物考古研究所を訪問し、田立坤所長と今年度の具体的な調査計画について協議しました。今年度は特に、理化学的分析調査も計画しており、その準備を進めているところです。

それに関連して、昨年度２月に天理大学附属天理参考館のご協力を得て、天理参考館所蔵の陶俑（とうよう）を調査しました。これは現地での本格的な調査の下準備を兼ねて、主として熟覧による調書作成や写真撮影をおこないました。今年度は６月23・24日の２日間にわたり、所外の研究者も含めて７名の調査者で、蛍光Ｘ線分析やマイクロスコープによる観察、赤外線写真撮影と３Ｄデジタイザによる計測をおこないました。

天理参考館所蔵の陶俑には、駱駝・猪・犬・牛などの動物俑や、甲冑武人・胡人・文官などの人物俑というように、様々なものがありますが、今回はそれらのうち15点の陶俑について調査し、分析結果を現在、解析、整理しているところです。

これらの資料は、遼寧省朝陽市隋唐墓出土陶俑によく似ており、産地が同じものも含まれているのではないかと思われます。10月に予定している瀋陽市での調査でも同様の分析調査を計画しており、今回の天理参考館所蔵品の分析結果と、遼寧省出土品の分析結果との比較から、何か興味ある事実が明らかになるのではないかと期待しています。また今回、新型の携帯式蛍光Ｘ線分析装置も試験的に使用して、その実用性を確かめるために、従来型の小型蛍光Ｘ線分析装置の分析結果との比較もおこなっているところです。　　（企画調整部　小池 伸彦）

３Ｄデジタイザによる駱駝俑の計測

日韓発掘調査交流に参加して

大韓民国慶州国立文化財研究所との間にかわされた日韓発掘調査交流の一環として、約１ヶ月間奈良文化財研究所に滞在された李柱憲先生と兪洪植先生から研究交流に参加した感想をいただきました。

2008年１月21日午前９時50分、寒い冬の真っただ中、大きな轟音を響かせて釜山空港を発った飛行機は、いつのまにか関西国際空港に到着した。空港から都城発掘調査部飛鳥・藤原地区へ向かう途中、車窓から雪に覆われた生駒山地と二上山を見ることができた。その風景は非常に印象的で、私がよく目にする韓国の雪景色とはどこか違う印象を受けた。

研修では、発掘調査（甘樫丘東麓遺跡、平城宮東方官衙）への参加、遺跡見学・資料調査（吉野ヶ里遺跡、九州国立博物館など）をおこなった。

滞在期間中、最も印象深かったのは高松塚古墳シンポジウムへの参加である。高松塚古墳シンポジウムは、２年間にわたる高松塚古墳石室解体調査の報告会で、石室解体過程と、発掘以後の古墳と壁画の状態、そして今後の壁画の保存方針と遺跡整備計画について報告がなされた。そこは直接作業を遂行した関係機関の責任者たちが、古墳の解体と復元の必要性を一般市民に説明し、理解を高める場であった。800人を越える市民たちが報告会のために集まり、高松塚古墳の未来を思いつつ真摯に聞き入っていた様子は、まだ私の脳裏に鮮やかに残っている。特に、この日の行事は1949年法隆寺金堂の火事を契機に制定された文化財防火デーにおこなわれたもので、文化財に対する日本人の幅広い眼目を直接感じることができる機会でもあり、いっそう意味深く感じた。

（国立慶州文化財研究所　李 柱憲）

平城第429次調査現場にて（中央が李 柱憲先生）

韓日発掘調査交流協約に基づいて、2008年２月11日から４週間、奈良文化財研究所に滞在した。滞在期間中、甘樫丘東麓遺跡と平城宮東方官衙の発掘現場に参加する機会を得た。また、飛鳥時代と奈良時代の寺院の踏査、平城宮第一次大極殿復原現場の見学をおこなうことができた。

第一次大極殿の復原は文化庁主管で推進されており、平城遷都1300年にあたる2010年完工を目指してピッチをあげていた。私が復原現場を見学した２月20日には、全体的な骨格の組立は大部分仕上がっていて、もっぱら上層屋根の瓦を葺いているところであった。

第一次大極殿の基壇部には最先端の科学が適用されていた。基壇の内部には、水平・垂直振動はもちろん、不規則振動までも耐えることができる耐震基礎が設置されていた。このような特殊基礎によって建物の安定性が確保され、復原された大極殿は今後1000年以上耐久するとの説明を受けたが、その自負心を充分に理解することができた。

復原現場付近の製図室では、部材の組み上げた状態を実物大で作図した設計図を随時検証しており、実際に、組立工事をする前に必ず図上復原をおこなうと聞いた。少しの誤差も認めないという匠の心意気をうかがうことができた。

第一次大極殿復原現場を見学しながら、私が日本に到着した日に焼失したソウルの崇礼門（南大門）を思い出した。あっけなく焼失してしまったが、第一次大極殿復原事例などを模範として、充分な時間をかけて復原を推進すれば、崇礼門の原形を完璧に再現できると期待している。

（国立慶州文化財研究所　兪 洪植）

（日本語訳：都城発掘調査部　中川 あや）

平城宮第一次大極殿復原現場にて（右が兪 洪植先生）

飛鳥資料館秋期特別展のご紹介

「まぼろしの唐代精華－黄冶唐三彩窯の考古新発見－」

平成20年10月17日（金）～12月７日（日）

飛鳥資料館では、今秋「まぼろしの唐代精華－黄冶唐三彩窯の考古新発見－」展を中国河南省文物管理局と共同して開催します。

唐墓から出土する華麗な優品で知られる唐三彩。しかし、そこには未解決の問題がたくさん残されています。このため、奈良文化財研究所は2000年度より、総面積約16万㎡という中国屈指の唐三彩窯跡、河南省鞏義黄冶窯を対象とした「鞏義市黄冶唐三彩窯及び産品に関する共同研究」を中国の河南省文物考古研究所と進めています。この共同研究は、まだまだ謎の多い唐三彩の歴史、生産技術、流通、使用、さらには最近注目されるようになってきた唐代の青花瓷器の実態などを解明する上で不可欠なものとの評価を受け、国内外の研究者から熱い視線が投げかけられています。今回の展覧会は、その注目の国際共同研究の最新成果を皆様に広くわかりやすく公開するものです。

さて、今回の展示の見どころは、なんといっても唐三彩をはじめとする黄冶窯産の各種瓷器です。また、通常の唐三彩の展覧会では展示しないような三彩未成品や各種の窯道具も陳列します。さらに、黄冶窯にほど近い鞏義北窰湾唐墓群から出土した各種瓷器類の優品も目を引きます。出土した地点や遺構、層位が明確な、これら94点にものぼる資料を展示することで、唐三彩を含む黄冶窯産の瓷器類の実態や時間的な変化を具体的に示します。このほか、日本国内出土の唐三彩も展示し、唐境外での唐三彩のひろがりについて考察します。

秋たけなわの飛鳥にお越しになっていただき、唐代文化の精華というべき唐三彩を堪能していただければ幸いです。　（飛鳥資料館　加藤 真二）

展示品の一部（黄冶窯出土唐三彩）

■　記　録

埋蔵文化財担当者研修

○文化財写真Ⅰ（基礎）課程
　平成20年７月７日～23日　　９名

○文化財写真Ⅱ（応用）課程
　平成20年７月23日～８月６日　６名

発掘現場公開

○飛鳥藤原第153次調査「藤原宮朝堂院朝庭部」
　平成20年６月30日（月）～７月２日（水）
　965名

平城宮跡資料館展示

○発掘速報展
「平城宮跡東方官衙地区の調査（平城第429次）」
　平成20年７月１日（火）～８月31日（日）

飛鳥資料館展示

○夏期企画展「飛鳥古寺巡礼」
　平成20年８月１日（金）～８月31日（日）

平城宮跡歴史文化講座（第6回）
（NPO平城宮跡サポートネットワーク主催）

平成20年９月20日（土）　午後１時30分～
於：平城宮跡資料館講堂
「平城京から長岡・平安京へ」
　舘野 和己　奈良女子大学教授

■　お知らせ

公開講演会（第103回）於：平城宮跡資料館講堂

平成20年10月25日（土）　午後1時30分～
「平城宮とその周辺の先史時代」
　森川 実　　都城発掘調査部研究員
「洋風庭園と日本近代」
　粟野 隆　　文化遺産部研究員

平城宮跡資料館　特別企画展

○展示
「地下の正倉院展－長屋王家木簡の世界－」
平成20年10月21日（火）～11月30日（日）

飛鳥資料館　秋期特別展

○展示（上記「飛鳥資料館秋期特別展のご紹介」参照）

○記念講演会　　於：平城宮跡資料館講堂
平成20年10月18日（土）午後10時～午後４時
「飛鳥資料館特別展記念　中国河南黄冶唐三彩窯の考古新発見」
　巽 淳一郎　京都橘大学教授
　孫 新民　河南省文物考古研究所所長
　劉 蘭華　中国文化遺産研究院研究員
　郭 木森　河南省文物考古研究所研究員

編集「奈文研ニュース」編集委員会
発行　奈良文化財研究所　http://www.nabunken.jp/
Eメール　jimu@nabunken.go.jp
発行年月　2008年９月